

【研究ノート】

場所としての自然概念に関する研究の展開

田 口 誠

1. はじめに

現代社会では都市化やグローバル化、交通機関の発達などの諸要因によって人の流動性が高まり、人と場所とのつながりが希薄化している。場所はその性質上、人々が様々な活動をおこなうバックグラウンドを提供するにとどまると理解されているため、特に自然保護に関する研究においては他の客体と比較して注目が集まりにくい対象であった。馴染みのある場所、建物、社会設定を失った人々の存在によって場所の重要性が認識され、Fried (1963) による場所に関する研究がこのような人々に対するケーススタディから発展してきたことは、場所が個人において、さらに研究対象として認識されにくい状況であることを象徴している。場所には広いスケールのもからごく狭いスペースまで、あるいは都市環境から自然環境まで様々な性質のものがある。本稿では特に自然環境に焦点を当て、場所の観点から自然および自然保護について先行研究を通して考察することを研究の目的とする。自然環境は個人や集団が活動をおこなう場所のひとつであり、このような場所という視点から自然環境を認識することで個人や集団の自然環境に対する態度や行動の一部を理解することが可能になると考えられる。

保護対象としての自然の選定や範囲、程度は自然環境の物理的性質のみならず、人がそれを主観的にどのように認識し、意味を付与するかに依存する。個人や集団の場所に対する愛着を示す場所アタッチメント (place attachment) は、個人が感じる安心感 (sense of safety) (Billig (2006)), 苦痛 (distress) の程度 (Fried (1963)), 環境態度 (Stedman (2002)), 自然環境の利用 (Moore and Graefe (1994)) などの様々な心理的、行動的要素に影響を与えることが知られている (Scannell and Gifford (2010))。したがって、自然保護の観点からは具体的な場所もしくはより抽象的な場所やイメージとしての自然に対する愛着を持つことは、自然への認知や自然環境保護活動への動機や行動に影響を与える可能性がある。自然保護の対象や保護の程度を選択する上で対象の自然科学上の重要度はひとつの判断基準になるが、人が対象に対して持つ認知も同時に大きな役割を果たすと考えられる。保護対象の選定は、自然科学上の正しい解に対して認知上のバイアスの影響を受けることになる。現代における保護基準の選定は基本的に人間中心主義にもとづく保全の概念、すなわち人に対する便益という判断基

準にもとづいており、少なからず保護対象への愛着がその背後にある動機に関わらず保全を促進させる側面を持つと考えられる。自然環境の保全が過小であるならば、それを是正する効果を持つことになる。

そこで本研究では、アタッチメントの対象となる場所の定義およびその多様性、場所アタッチメントの概念やその構成要素、原因や効果についてのこれまでの研究を整理することで、場所と自然環境に関する研究の展望について考察する。

2. 場所アタッチメントの理論

2.1 アタッチメントの対象としての場所

場所としての自然環境について考察を始める上で、まず場所とは何かを定義しておかなければならない。アタッチメントの対象となる場所の性質には多様性があり、また、場所と類似した概念も存在するため、これらとの区別をつけることが重要である。さらに、研究が進められる過程において、場所とは必ずしも具体的な場所を意味するとは限らないと解されるようになったことにも留意が必要である。

場所アタッチメントにおける場所 (place) は、まず空間 (space) と区別される。一般的に、空間は場所よりも抽象的な概念である (Tuan (1977))。空間は差別化され得ないが、個人が空間を知るようになることでその空間に文脈や価値が付与されて場所として認識されるに至る。また、空間は動作を許容するが、場所は停止している客体である。人は場所という客体に対してアタッチメントを構築するのであり、空間に対して構築するのではない。

そして、場所とは単に物理的な特定の場所に限定されるのではなく、多様な性質を持つ場所がアタッチメントの対象になりうるとする見解が一般的である。範囲 (range)、有形なもの (tangible) とシンボリックなもの (symbolic) のいずれか、経験されうるものであるかという3次元で多様な対象を含めることが可能である (Low and Altman (1992))。また、Hidalgo and Hernandez (2001) は範囲 (scale)、具体性 (specificity)、有形性 (tangibility) などの次元からアタッチメントの対象となる場所を分類できるとし、先の Low and Altman (1992) に類似した次元から場所の多様性について言及している。いずれの分類においても、特に場所の具体性および経験可能性をひとつの軸として認識している。場所に対するアタッチメントは特定の場所に対するアタッチメントから概念的なアタッチメントまで存在する。必ずしも具体的で実在する場所、すなわち経験できる場所や過去に経験した場所に制限されるべきではないと考えられているのである。

場所や場所アタッチメントの研究は、自宅やごく狭い場所、コミュニティに対するアタッチメントの研究として進展してきた経緯がある。1960年代頃まではアタッチメントの対象と

なる場所はコミュニティであり、したがって場所は具体性のある物理的な場所に限定して考察されてきた。このような研究が進展した社会的背景にはコミュニティや近隣関係の弱体化、あるいは地域再開発などの特殊な事情にもとづく住民の強制的な移転などがあり、コミュニティの再構築を課題とした研究がおこなわれるようになった。コミュニティに関するケーススタディにもとづく、必然的に対象となる場所の範囲は比較的狭くなり、具体性や有形性を持つ対象に分析が限定されやすい傾向がある。また、場所の物理的特性よりも場所で形成される社会的関係性が重視されるケースが多い。自然を対象とする場合にはコミュニティ研究とは異なる側面が存在し、必ずしもコミュニティ研究の議論を援用することで十分な要素の抽出ができるとは限らないことに注意が必要である。

自然研究において場所を考察する際に、対象としての場所の具体性や有形性、経験性に制約されるべきではないとする見解を支える根拠としては自然環境の持つ非利用価値の存在が挙げられる。非利用価値は遺産価値や存在価値で構成され、評価対象となる自然環境を利用した経験が無いにも関わらず当該自然環境を保護することに見出される価値である。例えば、米国における国立公園の創設において、多くの支持は対象となる自然から遠距離にある地域に居住する非利用者から集まったことが知られている (Nash (1967))。

場所を定義する上で、場所の持つ形式的要件よりも実質的要件を重視した研究には Tuan (1977) がある。この研究では、場所を経験によって構築される意味の中心であると捉えている。場所とは単なる空間上の1点にとどまらず、人がその場所で過ごすプロセスを通して風景に付与する意味を取り込んだ概念であると考えられるのである。自然環境における場所の研究では形式的要件にとらわれず、このような場所の持つ実質的側面にもとづく定義にしたがうことで、特に自然をめぐる個人の認知や感情について柔軟に考察することが可能になる。

さらに、特定の場所に対する経験によって形成された記憶や意味付けにもとづき、過去の場所に対してもアタッチメントを持つ可能性があることは先行研究において指摘されている (Hay (1998a), Manzo (2005))。この場合、過去の経験を一貫性や情報処理の容易性といった観点から再整理して情報を組み立てる、すなわち情報をスキーマに分類し、具体的な特定の場所ではなく、ある性質を共有する場所群など一般的な場所に対してアタッチメントを感じるケースも想定しうる (Scannell and Gifford (2010))。Stokols and Shumaker (1981) ではこのような場所に対する依存を一般的場所依存 (generic place dependence) と呼んでいる。

自然を対象とした研究では場所の抽象性が重要になる一方で、コミュニティ研究においてウェイトが置かれてきた要素は場所における対人関係の構築である。自然保護に関する研究では景観や生態系の状態などの自然の物理的側面を強調する傾向があり、場所としての自然において形成される対人関係については過去において十分な研究対象になって来たとは言い

難しい。場所とはその中で起こった対人関係、コミュニティ、文化的関係のリポジトリーであり背景である。人々は単に場所自体に対してではなく、このような社会的関係に対してアタッチメントを持つとされている (Low and Altman (1992))。なお、この定義にもとづいた自然の分析では物理的環境が社会的関係を構築する上での制約となるため、場所の物理的側面を除外するのではなく、物理的側面に社会的側面を加えて分析対象とすべきである。Hidalgo and Hernandez (2001) は、アタッチメントを感じる対象としての場所を定義する際に社会的側面を重視しすぎており、合わせて物理的要素についても同様に十分に検討を加えるべきであると指摘している。また、Riger and Lavrakas (1981) では場所アタッチメントを感じる対象の要素としての場所には物理的および社会的要素の両方があり、物理的要素として場所に対して根付いていること (rootedness)、社会的要素として結合 (bonding) が必要であるとしている。物理的および社会的要素として、それぞれ場所への根付きと関与 (rootedness and involvement) および地域的つながり (local ties) の2次元性を挙げている研究例もある (Taylor, Gottfredson and Brower (1985))。

このような観点から人の場所へのアタッチメントを論じる時、さらに詳しい要素に再分類すると次の3つの要素が研究対象となりうる。すなわち、自然の物理的環境、場所としての自然の中でおこなわれる人の活動、物理的環境に根ざして形成される個人や集団の心理的プロセスの研究である。自然の物理的環境すなわち場所自体に関する研究は、この中のひとつの要素に過ぎないことが分かる。

また、コミュニティ研究では主として場所としての自然の中で形成される集団の対人関係を研究の対象としてきたが、対人関係によらず個人のアイデンティティの確立という観点から場所アタッチメントを論じる研究がある。すなわち、場所の際立った特徴が自己概念 (self concept) の形成に寄与するとの見解である (Twigger-Ross and Uzzell (1996))。

場所の研究方法としては仮説検定にもとづく数量的手法に加えて、現象学 (phenomenology) にもとづいた分析が提案されている。現象学にもとづく分析では、場所の物理的な特質、個人や集団にとっての場所の特質に注目しつつも、特に場所に対する個人の主観的解釈の相違に焦点を当てながら考察が加えられる。その手法の基礎には、場所を各構成要素に分類するのではなく全体として取り扱うべきであり、場所を要素に分解することで各要素とアタッチメントの間に因果関係を構築することはできないとする論理がある。先天的要因や環境的要因が同じであっても、同じ場所に対して異なる感じ方をする個性の多様性に分析の主眼を置いているためである。

場所の研究は実証分析にとどまらず多様な手法が提案されているが、これらのアプローチの統一化を図ることは困難である。異なる概念や用語のレベルを超えたパラダイムの相違であり、これらのアプローチを統一することはできないと考えられている。Patterson and

Williams (2005) では、場所を捉える上で多くの手法が存在する理由を世界観、パラダイム、研究プログラムという3つのレベルで説明しており、統合は最下層である研究プログラムレベルにおける相違にとどめるべきであるとしている。

2.2 場所アタッチメント

場所アタッチメントは、Relph (1976) において、基礎的な人のニーズを充足する環境への感情的結合であるとされており、認知ではなく感情が強調された定義となっている。また、Riley (1992) によると、場所アタッチメントとは人と風景の間の感情的関係であり、認知や選好、判断を超えるものであるとしている。ここで選好とは異なる場所間の相対的な比較と順位付けを意味している。Relph (1976) と同様に感情的側面を重視した定義となっている。

コミュニティに対する感情を対象とした研究である Hummon (1992) においては、場所アタッチメントは場所における感情的投入 (emotional investment) であると定義されている。コミュニティに対する感情はコミュニティ満足 (community satisfaction)、コミュニティ・アタッチメント、同一化 (identification) の3つの側面から理解することができ、アタッチメントは3つのアプローチの1つとして位置づけられている。なお、インタビューを通じた質的分析により、これらの概念は相互に関連を持ちつつも、その関連の度合いはそれほど強くないため異なる概念であると結論づけている。

一方で、Low and Altman (1992) は、個人やグループとその環境の間に養われるポジティブな結合であるとしており、人と場所のつながりを場所アタッチメントであると考えているが、合わせてこのようなつながりは感情と知識、信念、行動の相互作用の結果として生じると論じている。先の定義と比較すると、感情面に加えて認知的側面を定義に含めている点で異なっている。

また、Churchman and Mitrani (1997) では、場所の存在 (presence)、近接性 (vicinity)、接近可能性 (accessibility) により、個人によって経験されるウェルビーイングの状態であるとしている。認知、感情の区別ではなく結果としての心理的健康に関連させた定義であり、他の研究とは異なった内容となっている。

場所アタッチメントの研究はコミュニティに対するアタッチメント研究から発展してきた経緯があり、コミュニティへのアタッチメントの有無という観点から分析されてきたため、定義にはネガティブなアタッチメントを含めないケースが見られる。Hidalgo and Hernandez (2001) では個人と特定の場所の間のポジティブな感情的結合であり、その場所に対する近さ (closeness) を維持しようとする個人的傾向をその主な性質とすると場所アタッチメントを定義している。自然を対象とした場所アタッチメントの研究では、場所としての自然に対して恐怖や嫌悪などのネガティブな感情や曖昧な感情を含むことが指摘されていることから

(Manzo (2005)), コミュニティ研究の定義をそのまま援用してポジティブな側面だけを取り上げてアタッチメントを愛着と解釈することには問題がある。

場所アタッチメントをとらえる統合的フレームワークとして提案されているのが Scannell and Gifford (2010) による3つのPの多次元概念による分析である (Hernandez, Hidalgo and Ruiz(2014))。3つのPはそれぞれ人(person), 心理プロセス(psychological process), 場所(place)を意味している。主体, 客体, プロセスという3つの視点から場所アタッチメントを理解しようとする試みである。おもに1970年以降, 場所アタッチメントは様々な角度から分析されてきたが, 各分析は場所アタッチメントに関する一部の側面を取り上げたに過ぎなかったため, これらを総合的な視点から再整理したフレームワークである。この中で, 人の次元ではアタッチメントの主体として「個人と集団」, 心理プロセスとして「認知, 感情, 行動」, 場所として「空間レベル, 具体性, 社会のおよび物理的側面」などの象徴的な軸を設定することで場所アタッチメントを多面的に認識できるとしている。3つのそれぞれの次元は相互に独立しているとは限らないが, 理論的に場所アタッチメントを理解する上で有用な分類である。前節では場所の多様性について述べたが, 場所アタッチメントの多様性についても単なる場所の持つ物理的性質の多様性によってのみ生まれるものではない。Low and Altman(1992)によると場所アタッチメントの分析対象には次の次元を含んでおり, さらに多様性が高まることが予想される。すなわち多様性は, 主体の感情・認知・行動, 場所の範囲・具体性・有形性, 主体の範囲としての個人・グループ・文化, アタッチメントの時間的変動の有無といった次元から生じることになる。なお, 時間的変動については物理的もしくは心理的に発展過程にある対象や季節変動のある対象など, 場所は時間的に変化する対象であることを示している。さらに, 場所が不変であったとしても, 主体の認識においてアタッチメントが一時的現象でありうる。いずれのケースにおいても場所アタッチメントは時間要素の影響を受けることになる。場所の物理的要素に起因する多様性は, 上記のうち場所の範囲・具体性・有形性の部分のみであり, 場所アタッチメントについて考察する際には多様性が様々な観点から発生しうることが分かる。

2.3 場所アタッチメントの類似概念

場所アタッチメントと類似した概念のひとつに場所の感覚 (sense of place) がある (Lynch (1960))。場所の感覚は, 一般的には人や集団によって空間的環境に対して付与された意味であると定義され (Jorgensen and Stedman (2001)), このため場所アタッチメントと同義, あるいは類似した概念であると言える。また, Hummon (1992) においては, 人々の環境に対する主観的知覚であり, 環境に対する意識的感情であると定義され, 具体的には環境に対する解釈的知覚と環境への感情的反応の両方を含むとされている。

Stedman (2003) は、場所の感覚に関する実証研究を進める上での課題として次の点を挙げている。まず、場所満足 (place satisfaction) の概念を導入し、場所の重要性である場所アイデンティティと場所に対する態度を区別し、後者は場所満足によって表象されるべきであるとしている。また、場所の持つ意味とアタッチメントを区別する必要がある。場所や風景に意味を見出して、その結果としてアタッチメントを感じるというプロセスの中でこれらは前後関係を持つ別の要素として認識されなければならない。同様の論点は Greider and Garkovich (1994) においても指摘されており、社会的に構築される意味がアタッチメントの基礎になるとして各概念を区別している。実証分析ではアタッチメントの強さに着目した研究が多く、その原因である意味の内容、すなわち場所にアタッチメントを感じる理由について分析した事例は少ない。このため、場所アタッチメントのプロセスを研究する必要があるとも指摘している。社会的関係と物理的環境のいずれが場所アタッチメントと強くリンクするか、場所アタッチメントは一定の時間を必要とするのか、あるいは短期間のプロセスとしても形成されるのかについても論点となる。これらに加えて、物理的環境が場所アタッチメントに及ぼす影響のルートを解明する必要もある。3つの潜在的なルートがあり、物理的環境が直接的に場所アタッチメントに作用する第1段階のプロセスとしての「直接的プロセス」、物理的環境が行動に影響し、行動が場所アタッチメントに作用する第2段階のプロセスとしての「行動を通じた間接的プロセス」、物理的環境が行動に影響し、行動が場所の意味付けを与え、意味付けが場所アタッチメントに作用する第3段階のプロセスとしての「行動および意味付けを通じた間接的プロセス」のそれぞれにおいて物理的環境は場所アタッチメントに影響を及ぼすとしている。最後に、場所アタッチメントがその後において森林マネジメント、環境保全行動などの行動に与える影響を解明する必要があることにも言及している。現象学アプローチの有用性を示しつつ、この研究では実証的アプローチの導入を図っている。場所アタッチメントが増加した場合において長期居住、森林マネジメントの提案行動、デモ行動などの場所の保護行動を促進させることが明らかにされている。

Stedman (2003) では、場所への愛着を示す尺度として場所の感覚以外にも場所アイデンティティ、場所への根付き (place rootedness) (Hay (1998b)) などの名称が混在していることを指摘している。さらに、場所帰属、場所の既知感 (place familiarity)、近隣アタッチメント (neighborhood attachment) (Brown, Perkins and Brown (2003))、トポフィリア (topophilia) (Tuan (1990))、関係性 (relatedness) なども類似した概念の一例として挙げられる。このように多様な定義が存在するのは、人々の行動を考える上で場所の概念の重要性が1990年代までは様々な分野や研究者において個別に認識されており、類似概念の統一性が図られなかった結果である (Patterson and Williams (2005))。

Relph (1976) では、場所アイデンティティについて考察する上で、特に場所に対して人

が感じる一体化の度合いを外部性 (outsideness) と内部性 (insideness) という特徴的な概念を用いて整理している。ここで外部性とは人が場所に対して疎外感を持っている状態を、内部性とは深く無意識に没頭している状態を示している。外部性と内部性はさらに細分化され、実存的外部性 (existential outsideness)、客観的外部性 (objective outsideness)、付随的外部性 (incidental outsideness)、代理的内部性 (vicarious insideness)、行動的内部性 (behavioral insideness)、共感的内部性 (empathetic insideness)、実存的内部性 (existential insideness) の順に内部性の程度が高まり、主体である個人と客体である場所の同化が大きくなるとしている。すなわち、個人と場所の同化の程度は、場所に含められた意味を意識しない、場所を外部から客観的に観察する、活動の内容を場所よりも重視するといった外部性の状態から、他人によって伝えられる経験に共感する、実際に場所の内部からオープンで柔軟に場所の持つ意味を考慮する、意識的な熟慮をせずに内部者として場所を見るといった内部性の段階に分類される。このような分類は場所アイデンティティが形成される基礎条件を明確にしている。さらに重視される場所アイデンティティの要素は内部性の度合いによって異なる。実存的外部性や客観的外部性、付随的外部性では達成不可能な関与、外面的アイデンティティ、所在地、対象物、場所の機能などが重視されるのに対し、内部性が高まるにつれてコンセンサスの基礎となる風景、文化価値や経験の記録、表現としての場所の要素、熟考をともなわずに継続して存在する場所の意味が重視される。

自然との一体感 (connectedness) を測る尺度として、Mayer and Franz (2004) は NEP, INS, IAT, CNS を比較しており、これらの尺度は一体感の異なる側面を計測していると指摘している。この研究によると、Dunlap, Van Liere, Mertig and Jones (2000) による NEP (New Ecological Paradigm) は認知的要素を多く含む指標であり、自然に対する一体感を総計した尺度としての特徴を持っている。また、Schultz (2001) による INS (Inclusion of Nature in the Self) は、自己アイデンティティに自然を含む度合いを示す尺度である。Schultz, Shriver, Tabanico and Khazian (2004) による IAT (Implicit Association Test) は感情的要素を含む尺度であるが行動との関連が小さいことが問題点とされている。最後にこの研究で提唱されているのが CNS (Connectedness to Nature Scale) である。感情的要素を含んだ信頼性のある多項目尺度であり、行動との関連性も大きいとして、従来の尺度に関わる問題の解決を図っている。

2.4 場所をめぐる概念の関係性

前節では場所アタッチメントについて類似する概念が多く存在することを示したが、いくつかの先行研究ではこれらの各概念を階層構造として理解することで整理をおこなった例があり、各概念を区別する上で有用なアプローチとなっている。

場所アタッチメントと場所アイデンティティの関係性については諸説がある。Hernandez, Hidalgo, Salazar-Laplace and Hess (2007)によると、両者を同義語であるとする見解 (Brown and Werner (1985))に加えて、場所アイデンティティは場所アタッチメントをオペレーション化するものであるとする主張もある (Lalli (1992))。さらに、両者には因果関係や順序関係があるとする意見もあり (Hay (1998a)), Chawla (1992) による研究では場所アタッチメントが場所アイデンティティに先行することが示されている。これらの見解に加えて、場所アタッチメントは場所アイデンティティ、場所依存 (place dependence)、社会的結束 (social bond) などの多次元の要素によって構成されるとする意見もある。なお、Hernandez, Hidalgo, Salazar-Laplace and Hess (2007) では、一般的に場所アタッチメントと場所アイデンティティの相関は高い一方で、移民などの場合において必ずしも両者の高低が一致しないことを明らかにしている。また、場所アイデンティティは安定的であるのに対して場所アタッチメントは比較的短期間で変化しやすいと指摘している。このことから、両者は同義ではなく、因果関係や順序関係、階層関係があることが示唆されていると言える。

Hernandez, Hidalgo and Ruiz (2014) は、このような類似概念の関係性が各研究においてどのように異なっているかについて、非階層モデル、場所アタッチメントを上位概念とする階層モデル、場所アタッチメントを下位概念とする階層モデルに分類して整理している。下記の分類は主に当該研究に依拠しているが、各概念の正確な定義や相互関係を理解しておくことは場所アタッチメントに関わる詳細な議論を進める上での前提条件として重要となる。

非階層モデルにおいては、場所アタッチメントは1次元の概念であると考えられている。場所アタッチメントを構成する下位の概念は想定されず、また、場所アタッチメントが他の概念の構成要素とはなっていない。場所の感覚や場所アイデンティティ、場所依存などの明確な関連性や階層構造は意識されないため、明確な定義を避けたまま類似概念として相互代替的に用語が使われるケースも多い。特に初期の研究では、意図せず非階層モデルにもとづいて研究が発展してきた。

次に、場所アタッチメントを上位概念とする階層モデルの実証例は数多く存在する。最も広く用いられてきたモデルは、場所アタッチメントは場所アイデンティティと場所依存の2つの要素から構成されているとするモデルである。この枠組みにしたがうと、場所に対するアタッチメントは単に場所の持つ機能的特徴である場所依存の範囲を超えており、感情的およびシンボリックなアタッチメントの要素としての場所アイデンティティを含む構造となっている。場所依存は、ある活動のニーズを満たすために当該場所が他の場所と比較して相対的に必要とされることであると定義される。すなわち、場所依存ではその場所が持つ資源の特異性や機能性がアタッチメントの源泉となっている。一方で、場所アイデンティティは物理的な場所との関連において個人のアイデンティティが定義される自己の次元である

(Proshansky (1978))。場所は自己アイデンティティを確立、維持するための手段として認識される。このような自己と他者との社会的相互作用における仲介要素として場所が認識される時、場所アタッチメントの性質は感情的、シンボリックなものとなる。なお、Williams and Vaske (2003) では実証分析の結果として場所アイデンティティと場所依存が2つの要素として抽出されており、2分割モデルの有力な証拠となっている。

このようなモデルとは若干異なり、Bricker and Kerstetter (2000) は、場所アタッチメントが場所依存、場所アイデンティティ、個人のライフスタイルとの関連性の3要素で構成されていることを実証分析によって導出している。ただし、個人のライフスタイルとの関連性の軸は比較的説明力が弱いとされており、また、その他の軸として場所依存と場所アイデンティティが挙げられていることから、実質的には先述の2要素モデルに近い内容となっている。この研究では、これらの3つの構成要素を持つという仮定のもとで、利用の専門化 (specialization) のレベルとそれぞれの構成要素との関連性について調査している。ここで、専門化とはある場所において器具や技術を必要とする専門性の高い活動を好む度合いを意味しており、このような問題意識の背景には高い専門化を要求される活動ほどその特定の場所でしか活動が実現できない程度が高まるという論理がある。なお、専門化の程度については多くの研究では活動の経験量を1次元尺度として利用するケースが多いが、この研究ではBryan (1979) による多次元概念を用いている。すなわち、活動の専門性を測るための次元として、参加の度合い、テクニクの種類、選好される場所の設定、過去の利用経験、ライフスタイルの中心を占めること (centrality to lifestyle)、関与の6つに分類されている。このうち、関与は専門性を測る感情的要素であり、自己表現、社会性、純粋な喜びの3項目から構成されている。分析の結果、高い専門性のレベルは高い場所アイデンティティとライフスタイルとの関連性に関係づけられる一方、場所依存については関係を持たないことが明らかになっている。そこで、場所アタッチメントを構成する各要素は専門性との関連で異なった動きをすることから、場所アタッチメントを単一の次元で捉えることは望ましくないと結論づけている。また、高い専門性を求める人が場所に対して高いアタッチメントを持つとは限らない。専門性の低い人に合った場所が存在することが示唆されている。

場所アタッチメントの下位概念が3つに分類できるとする他の研究例としてはLewicka (2011) がある。この研究では、Hummon (1992) の分類にしたがった実証分析により、アタッチメントのタイプを伝統的アタッチメントとしての受け継がれた場所 (place inherited)、アクティブ・アタッチメントとしての発見された場所 (place discovered)、条件付きアタッチメントとしての相対的な場所 (place relativity) の3つに分類している。また、Scopelliti and Tiberio (2010) は因子分析による実証分析をおこなうことにより、一体感 (identification)、資源の不足 (lack of resources)、社会的関係 (social relations) の3つをアタッチメントの要素

として抽出している。さらに、Gustafson (2001) は理論的に個人的な軸としての自己 (self)、社会的な軸としての動植物を含む他生物 (others)、物理的な軸としての環境 (environment) の3軸に分類している。ここで、自己とはライフ・パス (life path)、個人の経験、自己同定 (self-identification) など個人の意味付けに関連づけられる要因を示している。

3次元を超えるモデルを提唱した例は少ないが、場所アタッチメントの5次元モデルも提案されている。Raymond, Brown and Weber (2010) では、場所アタッチメントの構成要素としては場所アイデンティティ、場所依存、自然との結合 (nature bonding)、社会との結合 (social bonding) を挙げ、さらに社会との結合を家族との結合と、友人との結合の2つに細分類することで5次元モデルとしている。このモデルの特徴は、場所アタッチメントの構成要素を理論的な観点から個人、自然環境、コミュニティの各段階に分類している点にある。すなわち、場所アイデンティティおよび場所依存は個人の次元、自然との結合は自然環境の次元、家族や友人を含む社会との結合は社会の次元に属している。このような3次元の分類の内容は、上記のGustafson (2001) と類似した議論となっている。場所アタッチメントに自然との結合を含めることについて、その理論的ルーツはディープ・エコロジーで提唱される自然の自己への統合をベースとした環境アイデンティティ理論に求められている (Clayton 2003)。実証分析では妥当性や信頼性は2次元モデルと類似する適合性が得られている反面、自然との結合の収束的妥当性、社会との結合の信頼性が低い結果となった。したがって、これまでに実証的には5次元モデルの有効性は肯定されているとは言い難いが、過去において広く用いられてきた場所アイデンティティと場所依存の2次元モデルには明示的に含まれていない自然環境やコミュニティのレベルを含めたモデルを提案していることは、場所アタッチメントについて考察する上で質的な意義を持つと考えられる。なお、この研究では場所アイデンティティと場所依存の関係についても述べられている。すなわち、両者の間には相関があり独立していないが、場所アイデンティティと場所依存は行動変数と関連付ける際にはそれぞれが異なる動きをすることが分かっているため、両概念を区別することには実証的な意義があることが明らかにされている。

次に、場所アタッチメントを下位概念とする2階層モデル、すなわち場所アタッチメントが他の類似概念の一部に含まれるとするモデルの一例として、Lalli (1992) では、場所アイデンティティは5つのサブカテゴリ、すなわち、他の街と比較したユニーク性 (evaluation)、日常経験における既知感 (familiarity)、街に所属している感情 (attachment)、過去の経験と街との関連性 (continuity)、将来における街へのコミットメント (commitment) から構成されると考えている。この他には実証分析にもとづき、場所アイデンティティの下位概念として場所アタッチメント、環境フィット (environmental fit)、場所と自己の一致性 (place-self congruity) の3つを挙げた研究がある (Droseltis and Vignoles (2010))。

場所アイデンティティを上位概念とするモデルに対して、Jorgensen and Stedman (2001) は、場所アタッチメントを場所の感覚の下位概念であると捉えている。ここで提唱されているのは、場所の感覚の構成要素として場所アタッチメント、場所アイデンティティ、場所依存の3つの要素があるとしているモデルである。人と場所をつなぐ要素を感情的、認知的、動能的 (conative) 要素の3項目に分類した上で、それぞれ感情的要素として場所アタッチメント、認知的要素として場所アイデンティティ、動能的すなわち行動的要素として場所依存を挙げている。実証分析にもとづくアドホックな分類ではなく、論理的分類であると言える。そして実証分析により、このような3要素モデルが、場所の感覚を1要素として捉えたモデルおよび場所アイデンティティ、場所アタッチメント、場所依存のいずれかのみを計測するモデルと比較してフィットが良いことを示している。この実証分析では、合わせて場所の感覚において、認知、感情、行動のどの要素が大きな影響を与えるかについても検討しており、結果として場所の感覚は感情的要素の影響を最も大きく受けることが示唆されている。

2.5 場所アタッチメントの原因

当該場所における居住期間が場所アタッチメントの水準を高めるとの研究がある一方で (Kasarda and Janowitz (1974)), 単なる旅行者や訪問者の方が高い場所アタッチメントを持つ場合があるともされており (McCool and Martin (1994)), 居住期間と場所アタッチメントとの関係について明確な結論は得られていない。一般的に居住に関わる流動性 (mobility) が高まり居住期間が短くなると場所アタッチメントが低下すると考えられているが、逆に居住期間が長くなることで、すなわち流動性が下がることで場所に対して当然とみなされる根付き (taken-for-granted rootedness) が高まり、場所への意識の低下が生じて場所アタッチメントが弱くなる可能性がある。Gustafson (2014) では、強制的な移住など、流動性のタイプによって場所アタッチメントへの影響が異なることを指摘するとともに、流動性が場所アタッチメントの対象となる場所のスケールに影響を与えたり、バーチャルな場所やより広い場所群へのアタッチメントを可能にしたりするなどの効果があるため、流動性と場所アタッチメントの関係は明確ではないとしている。個人が好む場所はランダムであるとは限らず、意識的プロセスを経て選択されるケースがあることも、居住期間とアタッチメントの関係を複雑にしている。過去に経験した場所の中で自らが好む場所をリフレッシュメントに利用する (Korpela & Hartig (1996)), ウェルビーイングを高めることができる場所を意識的に選択する (Wallenius (1999)), 一時的な退避場所あるいは疲労を回復できる場所として自然を選択する (Kaplan (1995)) などの選択的行為が過去の実証研究において挙げられている。場所における経験によって得られる認知的および感情的項目の変化は、単に場所における経験の結果として受動的に捉えられるだけでなく、これらの項目を得ることを目標として場所が選択的に経験さ

れる。したがって、場所の選択において自己選択の要素を含んでいるため、場所における経験の結果によって得られる認知的、心理的効果の計測は困難である。個人が特定の場所を選択する行為は自己制御 (self-regulation) の過程であると理解できる。自己制御の理論としてはCEST (cognitive-experiential self-theory) が広く知られている (Epstein (1994))。個人のコンセプトシステムを合理的 (rational)、経験的 (experiential) システムの2つに分類し、これらの独立したシステムが相互に関連しながら自己が形成されるとする二重過程 (dual-process) 理論である。経験的システムの中には直観や感情、連想などの項目が含まれるため、感情を基礎とした場所アタッチメント、および想像上の場所や特定の性質を持った場所群へのアタッチメントに対する説明が可能になると考えられる。

場所の感覚についてはその原因を実証的に探索した研究があり、年齢が場所の感覚に影響を与えると考えられている (Cuba and Hummon (1993))。また、場所アタッチメントのケースと同様に、居住期間が場所の感覚に影響することはRelph (1976) やTuan (1977) によって理論化されたが、実証的には両者の関連は明確にはなっていない。両者には複雑な因果関係が含まれることが予想できる。さらに、場所の物理的属性や環境への態度なども場所の感覚に影響を与えると考えられる (Proshansky, Fabian and Kaminoff (1983))。

2.6 場所アタッチメントの効果

場所アタッチメントの効果については、自然体験が直接的に主観的ウェルビーイング、エネルギー、物理的健康、ストレス軽減、リラクゼーションに対して効果を持つことを示した研究例はあるが (Kaplan (1995))、本稿では自然がアタッチメントの形成を通して物理的、心理的効果を持つことを示した例に限定して議論する。

場所アタッチメントの心理的効果としては、生存 (survival)、安心感 (security)、目標達成のサポート、自己管理 (self-regulation)、自己継続性 (self-continuity)、所属感 (sense of belongings)、アイデンティティ感 (sense of identity)、自尊 (self-esteem) に対するポジティブな効果が挙げられる (Scannell and Gifford (2010))。また、Proshansky, Fabian and Kaminoff (1983) では、認知的統合 (cognitive integration)、一貫性 (consistency)、不安 (anxiety) の抑制、自尊 (self-esteem) の維持などの目的で場所を利用すると結論づけている。Fried (2000) においても、場所アタッチメントが安心感の獲得につながり、それが自信や探究心の獲得につながることを指摘している。

また、自然への没入 (immersion) は自然との関係性 (relatedness) の感覚を高め、このような自然との関係性の感覚によって向社会志向の内発的要求 (intrinsic aspiration) にもとづいた環境行動が促進されるとする研究結果がある (Weinstein, Przybyski and Ryan (2009))。ここで内発的要求とは、個人的成長や親密性 (intimacy)、継続性 (continuity) など基本的な

心理ニーズを満たすために目標自体を追求することであり、金銭やイメージ、名誉など外的に与えられる報酬や認証などと区別されている。自然との関係性は愛情やケアなどの関係的感情や視点取得 (perspective-taking)、利他性 (altruism) にもとづく行動を可能にすることから内発的要求を高めると考えられている。一方で、場所を持つ物理的環境やアイデアを通して価値や行動を共有し、人が知人や家族と結びつきを強める効果を持つとの指摘もある (Low and Altman (1992))。場所はこれらの効果のための仲介手段に過ぎない可能性があり、アタッチメント研究の焦点は必ずしも場所の性質にとどまるものではないとする根拠となっている。

Scannell and Gifford (2010) では、この他に目標達成のサポート (Moore and Graefe (1994), Stokols and Shumaker (1981)), 自己管理 (Korpela (1989)) など、目標を達成する上でのプラスの効果を挙げている。また、自己継続性 (self-continuity) や安定した自己感 (sense of self) の維持 (Hallowell (1955)), 場所適合継続性 (place-congruent continuity) や場所参照継続性 (place-referent continuity) などの時間的な継続性の維持に対する効果もあるとされている (Twigger-Ross and Uzzell (1996))。なお、場所参照継続性とは、場所が登場人物を想起させたり、過去と現在を比較する機会を与えたりすることで時間的継続性が維持されることを示している。これらの効果に加えて、所属感に対するポジティブな効果を挙げている研究もある (Giuliani (2003))。

場所アタッチメントが環境態度や環境行動に対して効果を持つ場合、アタッチメントを通じた環境態度や行動への潜在的な介入が可能になるため、特にアタッチメントの原因となる要因を特定する研究の重要性は高い。過去においてこれらの関係性については研究されてきたが、態度や行動に対する影響があるとする説とないとする説が混在しており、明確な結果は得られていない。場所に対する感情的親近感 (affinity) は環境態度に影響をおよぼすが、特定の場所への機能的なニーズはこのような環境態度にはつながらないとする研究があり (Vaske and Kobrin (2001)), アタッチメントの構成要素のうち感情的要素と認知的要素が環境態度に対して異なる関係性を持つ可能性があることが示唆されている。また、この研究では環境行動との関係では、地域の自然資源への依存は場所アイデンティティを高め、これが一般的、特定の環境行動を促進させるとの結果を導出している。つまり、場所依存と場所アイデンティティは独立した項目ではなく、場所依存が場所アイデンティティに作用し、これが環境行動の決定要因になるというプロセスを示していることになる。

場所アイデンティティが環境行動に対して与える影響について否定的な結論を得た研究もある。このような研究例には、場所アイデンティティが社会的アイデンティティを高め、これが環境態度や環境行動につながるかを検証した Uzzell, Pol and Badenas (2002) がある。また、Devine-Wright and Howes (2010) では風力発電の建設に関して、場所アイデンティティと環

境態度の関係を検証し、両者の間には関係がないとする結果を導いている。なお、この研究では風力発電の建設を環境行動であると捉えているが、景観や野生動物に対する悪影響などの観点からは必ずしも環境保全的な行動であるとは考えられないために否定的な結果が得られた可能性があることを付記しておく必要がある。

3. 場所アイデンティティおよび場所依存に関する理論

場所アイデンティティとは、人生に対して意味や目的を与える感情や関係性のリポジトリとしての場所のシンボリックな重要性である (Williams and Vaske (2003))。様々なアタッチメントの定義について先述したが、広義のアタッチメントには認知的、感情的要素の両方を含み、この定義に基づけば場所アイデンティティとはアタッチメントのうち感情的要素であることが分かる。場所をめぐる初期の研究のひとつである Relph (1976) によると、場所アイデンティティの対象となる場所を構成する要素には、物理的環境、活動、意味の3つがあるとしている。このうち、意味については変化しうること、さらに他の場所へのトランスファーが可能であることを示した。この研究では3つの要素は独立しているのではなく相互に関係があり、これらの要素は場所アイデンティティの素材を提供しているに過ぎず、各要素間の関係性が場所アイデンティティを作ると考えた。さらに、4つめの要素として場所の感覚 (spirit of place と呼ばれることもある) が無形で長期にわたって継続する (persistent) 要素として重要であると述べている。社会的、文化的、技術的变化に対して場所のアイデンティティが緩やかにしか変化しない現象についての説明を試みている。

Proshansky, Fabian and Kaminoff (1983) は、場所アイデンティティは自己アイデンティティの下位構成要素であるとする観点から、自己アイデンティティに関する概念が応用できるとした上で、場所アイデンティティとは態度、価値観、思想、信念、意味、行動傾向によって特徴づけられる複雑な認知構造であり、特定の場所に対する感情アタッチメントの範囲を大きく超える範囲を含んでいると定義している。すなわち、場所アイデンティティは単に物理的な環境の設定によってのみ形成されるものではなく、場所を通じた他者との関係によって構築される態度や意味の影響を受けて形成されると考えている。その他、場所アイデンティティについてはある環境設定に対する感情や、場所とのシンボリックな関係性に対する感情など、自己を定義する次元であるとの主張もある (Raymond, Brown and Weber (2010))。

アイデンティティを考える上で留意が必要になるのは、アイデンティティには個人アイデンティティ (personal identity) と集団アイデンティティ (group identity) があり、いずれを想定するかによって分析に多様性が生じる点である。

個人アイデンティティでは、場所の特徴が自己概念 (self-concept) に重ねられる (Proshansky

(1978))。場所における経験を通し、それまで単なる風景として捉えられていた環境がシンボリックな意味を持ち、自己アイデンティティの拡張としての要素を持つにいたる。シンボリックな意味付けは様々な要素によって実現される。儀礼や物語を通して風景に文脈が付加されるケース、場所の内部に存在する感覚、すなわちRowles (1983)における内部性(inside-ness)の感覚が個人アイデンティティの確立や再定義を促進させるケースなどが考えられる(Hummon (1992))。

個人は知識にもとづいて評価対象や状況を評価し、この評価が行動の基盤となる。しかし、知識と行動の関係は直接的関係ではなく、両者の間には様々な要因が介在すると考えられている。その中でも、重要な要素として個人やグループのアイデンティティを挙げる研究例が多く見られる。Samuelson, Peterson and Putnam (2003)では、特定のグループに所属することで形成される自己概念であるグループ・アイデンティティが知識と行動の間に介在する重要な要素であると考えられており、グループ・アイデンティティが形成されるプロセス、およびグループ・アイデンティティが行動に与えるプロセスを分析している。特に、グループ・アイデンティティは知識から形成され、後に行動に影響を与えるという一方のプロセスではなく、行動を取ることでグループ・アイデンティティが補強、形成、修正を受ける可能性があることを指摘している。行動はグループ内で許容される行動、許容されない行動を明確に定義する効果を持つからである。

これまでに環境保護行動の促進における知識の重要性が示唆されてきたが、個人が単に過去の知識にもとづいて合理的に行動する側面に限定して研究対象とすることは望ましくない。自らの現実のアイデンティティや望ましいと考えるアイデンティティにもとづいて環境行動を取る、あるいは環境行動を取ることで自らのアイデンティティを形成、補強、修正している側面があるからである。このような考え方にもとづくと、自然環境をめぐる問題解決のために求められる合理的な解と実際に個人によって取られる行動は必ずしも一致しないことが予想できる。したがって、アイデンティティについての理解、アイデンティティと環境行動の関係について究明することは環境行動や、環境行動にもとづく環境変化を予測する上で重要な課題となっている。場所は文化の実践や保存をおこなう場であり(Fried (1963))、歴史的経験や価値観、シンボルの共有を通してメンバーをリンクさせ、グループのメンバーはグループ内の類似性やグループ間の異質性を確認する機能を果たしているのである。Scannell and Gifford (2010)では民族によって森林の保全状況に対する現状認識が異なるケースなどがこのような例にあたるとしている。さらに、集団アイデンティティはその性質上、社会アイデンティティ(social identity)と文化アイデンティティ(cultural identity)に細分類される。社会アイデンティティは場所を使って個人が周囲の比較的小集団に属する人々との相互作用を通して道徳的評判や社会的ポジションなどの自己を特定の集団内で形成するプ

プロセスを指すのに対し、文化アイデンティティは当該地域の人々の全体もしくは大半を他の地域の人々と比較することで自己が属する集団のアイデンティティを確立することを意味する。いずれも集団の中で自己を定義するプロセスであるが、比較対象の範囲や具体性、集団内における個人間の相互作用の程度に関してその性質は大きく異なっている。

実証的には、Manzo (2005) はグラウンデッド・セオリーを用いた質的調査から、場所アイデンティティが環境行動を強めるという関係を明らかにしている。特にアイデンティティのうち Twigger-Ross and Uzzell (1996) における自尊心 (self-esteem)、自己効力感 (self-efficacy)、差異性 (distinctiveness)、連続性 (continuity) が重要な要素となることが示唆されている。

個人アイデンティティと社会アイデンティティとの間の関係性については論争がある。すなわち、それぞれが独立しているとする見解 (Trafimow, Triandis and Goto (1991)) と関連性があるとする見解 (Ethier and Deaux (1994)) が混在している。個人アイデンティティは個人の特異性に着目する概念であるとする立場からは両者が別のものであると考えられう一方で、実証的には両者を統合したモデルの方が高い説明力を持つとする研究例もある。理論的な観点からは、個人アイデンティティは価値観へのコミットメントであり、社会的役割から定義されるものではないとの論理から2つのアイデンティティを区別している例がある (Hitlin (2003))。

また、場所アイデンティティを高める要因として場所における経験がどの程度の影響を持つのかについての研究がある。場所の訪問回数が場所アイデンティティを高めるとする研究がある一方で (Moore and Graefe (1994))、場所アイデンティティは経験によって高まるケースが多いものの直接的関係はないとする研究もある (Proshansky, Fabian and Kaminoff (1983))。したがって、この点についても明確な結論は得られていない。

場所依存については、Stokols and Shumaker (1981) による定義では、自己が1つあるいは複数の場所に対して場所の持つ機能的な側面から結びついているレベルを意味している。また、Williams and Vaske (2003) によれば、特定の目標や活動を支える特徴や条件を提供する上でその場所が重要であることを指している。さらに、Moore and Graefe (1994) においても、場所依存とは場所の設定が利用者の特定の活動をうまく機能させているかを意味している。最後に、Raymond, Brown and Weber (2010) による定義では、ある場所に対する個人の物理的結合 (physical connection) にもとづいた機能的結合 (functional connection) であるとしている。いずれの研究においても機能面における人と場所の結合が強調された定義となっていることは共通である。自然の持つ経済的価値は、存在価値の一部を除いて道具的価値であり、したがって代替地と比較した際の相対的価値である。自然の経済価値を論じる時には場所依存の価値を意味していると考えられる。この点からも、場所アタッチメントにもとづいて場所が持つ価値を考える上では、経済的価値もしくは場所依存の価値は場所としての自然が持つ価

値の一部を構成しているに過ぎないことが確認できる。

4. 結語

本稿では、自然を特定のタイプの場所として捉え、人と場所との認知的および感情的な関係性を上げた過去の研究を整理することで、自然保護活動の動機となりうる場所に対するアタッチメントの重要性について考察した。初期の研究では、場所アタッチメントは場所アイデンティティと場所依存の2要素から構成されるとの見解が一般的であった。この分類は実証分析の結果を受け、現在においても場所アタッチメントの要素ごとの詳細な分析をおこなうにあたって効果的な基本アプローチとなっている。その後、場所に対して個人や集団が示すアタッチメントや場所の感覚を分析する上で、Scannell and Gifford (2010) が3つのP、すなわち人 (person)、場所 (place)、心理的プロセス (psychological process) に分類した枠組みを示し、これによって場所アタッチメントに関する過去の研究は総合的な観点から認識されるようになった。場所をめぐるこれまでの研究のうち、コミュニティに関する研究では人が重視され、自然環境を対象にした研究では一般的に物理的環境にウェイトが置かれてきた。このような経緯から、特に現在では場所アタッチメントや場所の感覚の形成に関わる心理的プロセスを解明する研究が必要とされている。心理的プロセスの分析では、場所アタッチメントや場所の感覚に関わるシステムを認知、感情、行動の3つの要素から、これまで十分に援用されていない心理学理論にもとづいて分析することが必要とされている。なお、場所依存は認知、場所アイデンティティは感情に対応する概念であることについてはおおむね合意が得られていると考えて差し支えない。場所を分析する際に有効となる理論フレームワークとしては、Korpela (2012) が指摘したように、一般的アタッチメント理論、単純接触 (mere-exposure) 仮説、自己制御 (self-regulation) 理論、コーピング理論、CESTなどがある。また、場所としての自然とアイデンティティとの関係性を分析する際に、集団アイデンティティの形成についてSIT (social identity theory) の応用が有効であると考えられる。このモデルはグループに対する偏見やグループ間のコンフリクト、内集団バイアス (in-group favoritism) の分析に用いられてきた。自然をめぐるアイデンティティ形成の文脈では集団アイデンティティの重要性が指摘されており、SITを援用することで詳細な分析が可能となる。

場所をめぐる研究はコミュニティや建築などの各分野で生じた具体的な問題への取り組みに始まり、その後、各分野に散在する様々な概念の関係性が整理されて統合が図られた。現在ではこれらの諸概念の精緻化、より幅広い理論の援用、理論にもとづいた実証分析が課題となっている。

(成蹊大学経済学部教授)

【参考文献】

- Billig, M. (2006) “Is My Home Castle? Place Attachment, Risk Perception, and Religious Faith”, *Environment and Behavior* vol. 38, pp. 248-265.
- Bricker, K. and D. Kerstetter (2000) “Level of Specialization and Place Attachment: An Exploratory Study of Whitewater Recreationists”, *Leisure Sciences* vol. 22, pp. 233-257.
- Brown, B., D. Perkins and G. Brown (2003) “Place Attachment in Revitalizing Neighborhoods: Individual and Block Level Analysis”, *Journal of Environmental Psychology* vol. 23, pp. 259-271.
- _____ and C. Werner (1985) “Social Cohesiveness, Territoriality, and Holiday Decorations: The Influence of Cul-de-Sacs”, *Environment and Behavior* vol. 17, pp. 539-565.
- Bryan, H. (1979) *Conflict in the Great Outdoors*, The University of Alabama Press.
- Chawla, L. (1992) “Childhood Place Attachments”, in I. Altman and S. Low eds., *Place Attachment*, pp. 63-86, Springer.
- Churchman, A. and M. Mitrani (1997) “The Role of the Physical Environment in Culture Shock”, *Environment and Behavior* vol. 29, pp. 64-86.
- Clayton, S. (2003) *Identity and the Natural Environment: The Psychological Significance of Nature*, MIT Press.
- Cuba, L and D. Hummon (1993) “Constructing a Sense of Home: Place Affiliation and Migration across the Life Cycle” , *Sociological Forum* vol. 8, pp. 547-572.
- Devine-Wright, P. and Y. Howes (2010) “Disruption to Place Attachment and the Protection of Restorative Environments: A Wind Energy Case Study”, *Journal of Environmental Psychology* vol. 30, pp. 271-280.
- Droseltis, O. and V. Vignoles (2010) “Towards an Integrative Model of Place Identification: Dimensionality and Predictors of Intrapersonal-level Place Preferences”, *Journal of Environmental Psychology* vol. 30, pp. 23-34.
- Dunlap R., K. Van Liere, A. Mertig and R. Jones (2000) “Measuring Endorsement of the New Ecological Paradigm: A Revised NEP Scale”, *Journal of Social Issues* vol. 56, pp. 425-442.
- Epstein, S. (1994) “Integration of the Cognitive and the Psychodynamic Unconscious”, *American Psychologist* vol. 49, pp. 709-724.
- Ethier, K. and K. Deaux (1994) “Negotiating Social Identity When Contexts Change: Maintaining Identification and Responding to Threat”, *Journal of Personality and Social Psychology* vol. 67, pp. 243-251.
- Fried, M. (1963) “Grieving for a Lost Home”, in L. Duhl ed., *The Urban Condition: People and Policy*

- in the Metropolis*, pp. 151-171, Clarion.
- _____ (2000) “Continuities and Discontinuities of Place Introduction: Individual and Social Discontinuities”, *Journal of Environmental Psychology* vol. 20, pp. 193-205.
- Giuliani, M. (2003) “Theory of Attachment and Place Attachment”, in M. Bonnes, T. Lee and M. Bonaiuto eds., *Psychological Theories for Environmental Issues*, pp. 137-170, Ashgate.
- Greider, T. and L. Garkovich (1994) “Landscapes: The Social Construction of Nature and the Environment”, *Rural Sociology* vol. 59, pp. 1-24.
- Gustafson, P. (2001) “Roots and Routes: Exploring the Relationship between Place Attachment and Mobility”, *Environment and Behavior* vol. 33, pp. 667-686.
- _____ (2014) “Place Attachment in an Age of Mobility”, in L. Manzo and P. Devine-Wright eds., *Place Attachment : Advances in Theory, Methods and Applications*, Routledge, pp. 37-48.
- Hallowell, A. (1955) *Culture and Experience*, University of Pennsylvania Press.
- Hay, R. (1998a) “Sense of Place in Developmental Context”, *Journal of Environmental Psychology* vol. 18, pp. 5-29.
- _____ (1998b) “A Rooted Sense of Place in Cross-Cultural Perspective”, *Canadian Geographer* vol. 42, pp. 245-266.
- Hernandez, B., M. Hidalgo and C. Ruiz (2014) “Theoretical and Methodological Aspects of Research on Place Attachment”, in L. Manzo and P. Devine-Wright eds., *Place Attachment: Advances in Theory, Methods and Applications*, pp. 125-137, Routledge.
- _____, _____, M. Salazar-Laplace and S. Hess (2007) “Place Attachment and Place Identity in Natives and Non-natives”, *Journal of Environmental Psychology* vol. 27, pp. 310-319.
- Hidalgo, M. and B. Hernandez (2001) “Place Attachment: Conceptual and Empirical Questions”, *Journal of Environmental Psychology* vol. 21, pp. 273-281.
- Hitlin, S. (2003) “Values as the Core of Personal Identity: Drawing Links between Two Theories of Self”, *Social Psychology Quarterly* vol. 66, pp. 118-137.
- Hummon, D. (1992) “Community Attachment” in I. Altman and S. Low eds., *Place Attachment*, pp. 253-278, Springer.
- Jorgensen, B. and R. Stedman (2001) “Sense of Place as an Attitude: Lakeshore Owners Attitudes toward Their Properties”, *Journal of Environmental Psychology* vol. 21, pp. 233-248.
- Kaplan, S. (1995) “The Restorative Benefits of Nature: Toward an Integrative Framework”, *Journal of Environmental Psychology* vol. 15, pp. 169-182.
- Kasarda, J. and M. Janowitz (1974) “Community Attachment in Mass Society”, *American Sociological Review* vol. 39, pp. 328-339.

- Korpela, K. (1989) "Place Identity as a Product of Environmental Self-regulation", *Journal of Environmental Psychology* vol. 9, pp. 241-256.
- _____ (2012) "Place Attachment", in S. Clayton ed., *The Oxford Handbook of Environmental and Conservation Psychology*, pp. 148-163.
- _____ and T. Hartig (1996) "Restorative Qualities of Favorite Places", *Journal of Environmental Psychology* vol. 16, pp. 221-233.
- Lalli, M. (1992) "Urban-related Identity: Theory, Measurement, and Empirical Findings", *Journal of Environmental Psychology* vol. 12, pp. 285-303.
- Lewicka, M. (2011) "On the Varieties of People's Relationships with Places Hummon's Typology Revisited", *Environment and Behavior* vol. 43, pp. 676-709.
- Low, S. and I. Altman (1992) "Place Attachment: A Conceptual Inquiry", in I. Altman and S. Low eds., *Place Attachment*, pp. 1-12, Springer.
- Lynch, K. (1960) *The Image of the City*, MIT Press.
- Manzo, L. (2005) "For Better or Worse: Exploring Multiple Dimensions of Place Meaning", *Journal of Environmental Psychology* vol. 25, pp. 67-86.
- Mayer, F. and C. Frantz (2004) "The Connectedness to Nature Scale: A Measure of Individuals' Feeling in Community with Nature", *Journal of Environmental Psychology* vol. 24, pp. 503-515.
- McCool, S. and S. Martin (1994) "Community Attachment and Attitude toward Tourism Development", *Journal of Travel Research* vol. 32, pp. 29-34.
- Moore, R. and A. Graefe (1994) "Attachments to Recreation Settings: The Case of Rail-trail Users", *Leisure Sciences* vol. 16, pp. 17-31.
- Nash, R. (1967) *Wilderness and the American Mind*, Yale University Press.
- Patterson, M. and D. Williams (2005) "Maintaining Research Traditions on Place: Diversity of Thought and Scientific Progress", *Journal of Environmental Psychology* vol. 25, pp. 361-380.
- Proshansky, H. (1978) "The City and Self-Identity", *Environment and Behavior* vol. 10, pp. 147-169.
- _____, A. Fabian and R. Kaminoff (1983) "Place Identity: Physical World Socialization of the Self", *Journal of Environmental Psychology* vol. 3, pp. 57-83.
- Raymond, C., G. Brown and D. Weber (2010) "The Measurement of Place Attachment: Personal Community, and Environmental Connections", *Journal of Environmental Psychology* vol. 30, pp. 422-434.
- Relph, E. (1976) *Place and Placelessness*, Pion.
- Riger, S. and P. Lavrakas (1981) "Community Ties: Patterns of Attachment and Social Interaction in Urban Neighborhoods", *American Journal of Community Psychology* vol. 9, pp. 55-66.

- Riley, R. (1992) "Attachment to the Ordinary Landscape", in I. Altman and S. Low eds., *Place Attachment*, pp. 13-35, Springer.
- Rowles, G. (1983) "Place and Personal Identity in Old Age: Observations from Appalachia", *Journal of Environmental Psychology* vol. 3, pp. 299-313.
- Samuelson, D., T. Peterson and L. Putnam (2003) "Group Identity and Stakeholder Conflict in Water Resource Management", in S. Clayton and S. Opatow eds., *Identity and the Natural Environment: The Psychological Significance of Nature*, MIT Press, pp. 273-295.
- Scannell, L. and R. Gifford (2010) "Defining Place Attachment: A Tripartite Organizing Framework", *Journal of Environmental Psychology* vol. 30, pp. 1-10.
- Schultz, P. (2001) "The Structure of Environmental Concern: Concern for Self, Other People, and the Biosphere", *Journal of Environmental Psychology* vol. 21, pp. 327-339
- _____, C. Shriver, J. Tabanico and A. Khazian (2004) "Implicit Connections with Nature", *Journal of Environmental Psychology* vol. 24, pp. 31-42.
- Scopelliti, M. and L. Tiberio (2010) "Homesickness in University Students: The Role of Multiple Place Attachment", *Environment and Behavior* vol. 42, pp. 335-350.
- Stedman, R. (2002) "Toward a Social Psychology of Place: Predicting Behavior from Place-based Cognitions, Attitude, and Identity", *Environment and Behavior* vol. 34, pp. 561-581.
- _____. (2003) "Is It Really Just a Social Construction?: The Contribution of the Physical Environment to Sense of Place", *Society and Natural Resources* vol. 16, pp. 671-685.
- Stokols, D. and S. Shumaker (1981) "People in Places: A Transactional View of Settings", in J. Harvey ed., *Cognition, Social Behavior, and the Environment*, pp. 441-488, Lawrence Erlbaum Associates.
- Taylor, R., S. Gottfredson and S. Brower (1985) "Attachment to Place: Discriminant Validity, and Impacts of Disorder and Diversity", *American Journal of Community Psychology* vol. 13, pp.525-542.
- Trafimow, D., H. Triandis and S. Goto (1991) "Some Tests of the Distinction between the Private Self and the Collective Self", *Journal of Personality and Social Psychology* vol. 60, pp. 649-655.
- Tuan, Y. F. (1977) *Space and Place: The Perspective of Experience*, University of Minnesota Press.
- _____. (1990) *Topophilia: A Study of Environmental Perceptions, Attitudes and Values*, Columbia University Press.
- Twigger-Ross, C. and D. Uzzell (1996) "Place and Identity Processes", *Journal of Environmental Psychology* vol. 16, pp. 205-220.
- Uzzell, D., E. Pol and D. Badenas (2002) "Place Identification, Social Cohesion, and Environmental

- Sustainability”, *Environment and Behavior* vol. 34, pp. 26-53.
- Vaske, J. and K. Kobrin (2001) “Place Attachment and Environmentally Responsible Behavior”, *Journal of Environmental Education* vol. 32, pp. 16-21.
- Wallenius, M. (1999) “Personal Projects in Everyday Places: Perceived Supportiveness of the Environmental and Psychological Well-being”, *Journal of Environmental Psychology* vol. 19, pp. 131-143.
- Weinstein, N., A. Przybyski and R. Ryan (2009) “Can Nature Make Us More Caring?: Effects of Immersion in Nature on Intrinsic Aspirations and Generosity”, *Personality and Social Psychology Bulletin* vol. 35, pp. 1315-1329.
- Williams, D. and J. Vaske (2003) “The Measurement of Place Attachment: Validity and Generalization of a Psychometric Approach”, *Forest Science* vol. 49, pp. 830-840.